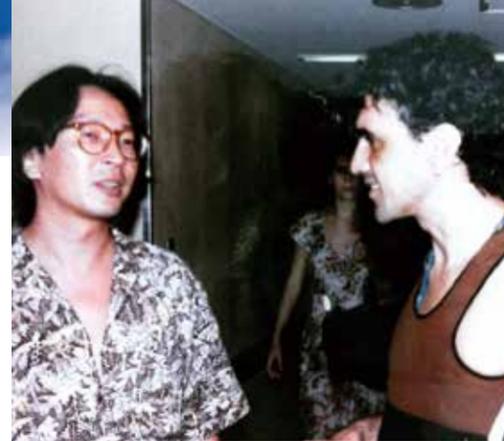


カエターノ・ヴェローゾを語る



中原 仁
(音楽・放送プロデューサー)



◀ 90年初来日時のバックステージ

カエターノ音楽との出会い

カエターノ・ヴェローゾの音楽を初めて聴いたのは40数年前、70年代の後半だった。同時期に聴いていた、ミルトン・ナシメント、ジルベルト・ジル、シコ・ブアルキ、ジョルジ・ベンといった同世代のシンガー・ソングライターと比べると、カエターノの印象は“ポップなアーティスト”。初めて買った彼のレコードにビートルズ・ナンバーのカヴァーが3曲、入っていたことも理由のひとつで、今、名前をあげた人たちの、情熱的で重量感があるスケールの大きな音楽性と比べると、カエターノの音楽はポップな分、軽く響いたというのが正直な第一印象だったが、敷居が低く自然体で親しめる音楽でもあった。当時はポルトガル語が全くわからなかったので、彼の“鍊語術”と呼べる詩の美学に触れるまでには至らなかったが…。

1987年、リオのライブ

初めてカエターノのライブを聴いたのは、87年、リオデジャネイロ。レコーディングの仕事が終わった日曜日で、この日は午前中、イパネマのビーチに行き、午後はブラジルのミュージシャンたちとレコーディングの打ち上げを兼ねてシュハスコを爆食。そこからマラカナン・スタジアムに移動してブラジル全国選手権の試合でフラメンゴを応援。快勝を見届けて一行と別れ、ホテルでシャワーを浴びて夜、一人でカエターノのライブを聴きに行くという、自分が30代初めてでなければとても対応できない、超ハードスケジュールな一日のフィナーレだった。

そんなわけで体は溶解目前、いつ寝てしまっても不思議ではない状態で臨んだライブだったが、いざ目の前にカエター

ノが登場して歌い出すと、脳が刺激されて頭の動きがどんどん活発になり、脳内のふだん使っていない神経が研ぎ澄まされていくのを感じた。カエターノには荘厳なカリスマ性と、気のいいアニキの表情と、裏町を歩くチンピラの佇まいが共存し、上半身をまとった衣装を脱いで頭にターバンのように巻きつけて歌うなど、演劇的な面もふんだんに披露。しかも、疲れ果てた体を抱擁しマッサージしてくれるような優しい歌声を聴いていると、自分が幽体離脱している錯覚にすら陥った。ある種、それまで自分が経験したことのない種類の音楽体験で、この日からカエターノは僕にとって特別な存在となった。

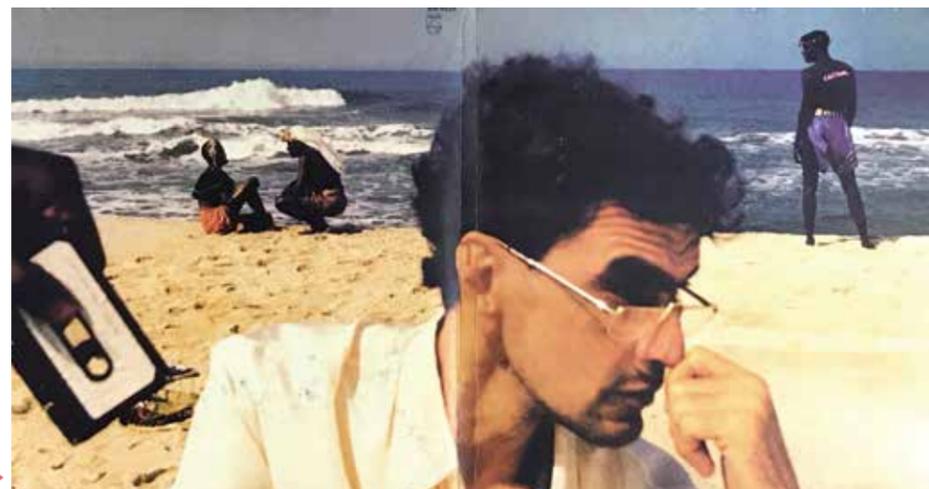
ちなみにこの日のライブは『カエターノ』と題する新作アルバムのお披露目で、レコードはリオにいる間に買ったがホテルの部屋にプレイヤーがないので、ライブの時点ではまだ聴けていなかった。ただ、レコードのアートワークが秀逸で、見開きのジャケットを広げると、故郷バイアの海岸に佇む思索者の表情のカエターノを中心に、数人のアフリカ系ブラジル人を配置した、著書『熱帯の真実』でも多くを書いているシネマ・ノーヴォの匠、グラウベル・ホッシャの映画を思わせる構図。音楽が聞こえてくるようなデザインで、まさにこのヴィジュアル・

イメージと同じ、“聴くシネマ・ノーヴォ”と呼べるライブであり、アルバムだった。

来日したカエターノとのインタビュー

カエターノの初来日は90年の真夏。アート・リンゼイらがプロデュースし、世界のロック・ファンにカエターノの「今」を伝えたアルバム『エストランジェイロ』のショーだった。このとき初めてインタビューできることになり、取材日が東京公演初日(8月7日、カエターノ48歳の誕生日)の前日だったので、東京に先がけて行なわれた大阪公演を聴きに行き、終演後に挨拶をして臨んだ。以来、東京では3回、インタビューしてきたが、通訳は毎回、『熱帯の真実』の訳者、国安真奈さん。ヴォキャブラリーが人並みはずれて豊富で時には理屈っぽく難解にもなるカエターノの発言に対応できる通訳は彼女をおいていない。

それまでも大勢の音楽家にインタビューしてきたが、カエターノの場合はたんなる質疑応答ではなく、言葉によるインプロヴィゼーションのセッションである。そう気づいた。カエターノは発言の中にさりげなく重要なヒントやキーワードを折り込み、それにインタビューアがどう反応するか、チェックしてい



▶ [Caetano] (87年) アルバムジャケット

たのだ。そのくせこちらが餌に食らいつくと、はぐらかし、たぶらかしといった言葉の妖術を駆使してスリと逃げるワザも心得ている。国安さんの名訳と配慮にも助けられてのことだが、彼ほどスリリングで刺激的で楽しい時を過ごさせてくれるインタビュー相手に出会ったことはない。

生地バイアの話聞いていたら「私自身は完璧なバイアーノだよ。もっとも最近ではリオでの生活も長いから、言葉がリオ訛りになってきたけど」との発言に続き、カエターノはこう言った。

「そうそう。昨日、大阪から東京に着いたんだけど、日本語も東京と大阪では訛りが違うみたいだね。どう？」

これには驚いた。音楽家、しかも言葉を使う歌手だから、耳が人一倍良いのは自然だが、耳の力だけでなく注意力、そして好奇心がなければ、なかなか気づけないだろう。

このインタビューでは、かかわりの深い音楽家についてのコメントも聞いた。最後は『熱帯の真実』の中で最も登場頻度が高い、ジョアン・ジルベルト。全文を引用する。

「すべてのブラジル・ポピュラー音楽にとってジョアン・ジルベルトが登場する前は、まだ前史に過ぎなかった。ジョアン・ジルベルトの出現によって歴史は変わった。ターニング・ポイントだ。過去から未来を照らし、統一した。彼はボサノヴァを確立させた。アントニオ・カルロス・ジョビンは最高の作曲家で素晴らしい音楽家だ。しかしジョアン・ジルベルトは、ボサノヴァを“可能たらしめた”のだ。そしてボサノヴァを国際化した。ジョアン・ジルベルトは原子核であり、最大の人物であり、無限の存在であり、私の至上の師、私にとっての最高の存在だ」。

このとき以降も何度かインタビューで

ジョアン・ジルベルトに関する質問をしてきたが、ジョアンについて語るカエターノはいつも、理屈や難しい言い回しを廃し、徹底して詩人の口調なのだった。

中原仁的エピソードをいくつか

その後、97年の来日公演(スペイン語圏の名曲を中心に歌う『粋な男(フィーナ・エスタンバ)』のショー)の際のインタビューを経て、98年11月にはロンドンでインタビュー。この時は通訳なしで臨む大胆不敵で無謀な設定だったが冒頭で「あなたの話を日本語に訳すにあたっては、国安真奈さんの力を借ります」と伝えたら「マナが君を助けるならパーフェクトだ。彼女は最高だよ」のお言葉。僕のポルトガル語のレベルを知っているカエターノは言葉を選びながら、小学校の教師並みのゆったりしたテンポで話してくれた。でもいったん着火すると一気に難解な表現と文法が続出、僕は討ち死にしたが…。

2005年の来日公演(アメリカン・スタンダード集『異国の香り』に自作の名曲をミックスしたショー)の時は、ドキュメンタリー・ロード・ムーヴィーの撮影スタッフが同行し、東京、大阪、京都で撮影したため、インタビューの時間がとれなかったが、完成した映画『コラサオン・ヴァガブンド』の中に、とても印象的なシーンがあった。

京都の寺院で僧侶がカエターノに近づき、「コラサオン・ヴァガブンド」(67年のデビュー・アルバム『ドミンゴ』収録の名曲)が好きで、ここ(境内)でときどき聴いていると英語で伝えたのだ。

これにはカエターノも大喜び。2016年の来日公演(弾き語りのソロ・パフォーマンス)で「コラサオン・ヴァガブンド」を歌った後、「ここ数年、世界中のどこでこの曲を

▼ ソロライブ (2012年リオ)



歌っても日本を思い出す」とアナウンスし、寺院でのエピソードにも触れた。

この時に行なったインタビューで、カエターノの3人の息子たち(モレーノ、ゼカ、トン)が音楽家として活動している話をしているふと思いつき「ファミリーでアルバムを作るというアイデアはどうですか? かつてのカイミ・ファミリー(ドリヴァル・カイミ&ナナ、ドリ、ダニーロ)のように」と水を向けたら「実はそれも考えていた。(中略)私はまだ日本に来ることが出来るなら、次はぜひ、モレーノと一緒にショーをやりたいと思っている」と話してくれた。

しかも、翌2017年から2018年にかけて、カエターノと3人の息子は国内およびヨーロッパ各国をめぐるコンサートツアーを行ない、ライブ盤『オフェルトーリオ』をCDとDVDで発表した。

78歳の誕生日にあたる2020年8月7日には、自宅のリビングで息子たちと共にライブを行ない、生配信した。カエターノの艶やかで色香に満ちた歌声は衰えを知らず、78歳とは思えない。世界が平穏な時代に戻ったら、ぜひこのメンバーで通算5度目の来日公演を行なってほしいと思う。



▲ ジルベルト・ジルとのデュオ・ライブ (2015年リオ)